

# 学位(課程博士)論文審査及び最終試験報告書

2021年8月21日

人間文化学研究科長  
野田 春美 様

## 学位論文審査委員会

審査委員長 長谷川 千洋

審査委員 早木 仁成

審査委員 村井 佳比子

審査委員 清水 寛之

審査委員 佐藤 浩一



本学学位規則第8条の規程により、論文審査の要旨及び学位の授与に関し

下記のとおり報告いたします。

## 記

学位申請者	堤 聖月
論文題目	日常記憶における忘却の認識に関する認知心理学的研究

## 論文審査の要旨

### 1. 本研究の概要

本論文は、個人が日常生活における忘却をどのように認識しているかに着目し、日常生活における忘却に関する認識と自伝的記憶との関連について心理学的に検討したものである。論文は全体として6つの章から構成され、大学生および高齢者を対象とする7つの研究を通じて、日常生活における忘却に関する個人の認識や信念の諸側面を明らかにしている。

第1章では、認知心理学における忘却に関する先行研究を概観したうえで、個人が忘却をどのように捉えているかに関する研究がこれまで十分でないことを指摘した。そして、日常生活において忘却の働きを人がどのように認識し、自身の中で位置づけているのかということがきわめて重要な問題であると主張した。そのうえで、この問題に関する実証的研究の重要性を述べた。

続く第2章から第5章までで、大学生および高齢者を対象に、合わせて7つの質問紙調査と面接調査を実施し、忘却の認識を特徴づけた。7つの研究調査の主要な成果は、①日常記憶における忘却に関する認識の特徴を新たに示したこと、②自伝的記憶に対する忘却への懸念を評定する尺度を開発したこと、③個人が「忘れたくない」と評価している記憶特性を明らかにしたこと、④忘却に関する認識の変化が加齢に伴って変化する様相を示したこと、とまとめることができる。

最後の第6章ではすべての調査結果を総合し、忘却は単なる情報の喪失ではなく、よりよく生きるための重要な精神機能の一つであるという結論を得た。

### 2. 本論文の特色と評価

従来の認知心理学では忘却は、記憶の失敗としてネガティブに捉えられることが多かった。一方、臨床場面では忘却は、望まないネガティブな出来事や思考の想起を抑制する機能をもつものとして、一定の機能が認められていた。こうした先行研究に対して、本研究では、個人がもつ忘却への「懸念」や「認識」が、忘却を含めて適応的に生きることには大きな役割を果たしていることを明らかにした。従来の研究にない新たな視座を提供した点が高く評価できる。

「忘却」の現象は「記憶」と表裏一体のものでありながら、これまで「記憶」「想起」「歪み」といった諸概念の裏側に隠れ、一部の臨床研究や加齢研究、精神分析研究を除くと、体系的に検討されることは少なかった。本論文は、「人が忘却をどのように認識しているか」という独創的な問題を設定し、新たな測定尺度の開発、質問紙調査と面接調査の併用、若齢者と高齢者の比較といった重層的な手法で検討を重ね、新たな知見を得た。その検討過程で開発された複数の測定尺度は、一定の妥当性ととも、若齢者にも高齢者にも活用できるという利点を有しており、今後の研究ツールとして多方面に活用されることが期待できる。本研究の成果に基づく将来の応用可能性に言及した点についても、一定の評価を与えることができる。

### 3. 判定

博士論文の提出要件については、すでに予備審査の段階で充足していることが確認されている(査読機関のある学会誌3編など)。本論文は、日常生活における人間の忘却の認識に関する基礎研究として新たな測定尺度の開発を含む貴重な研究成果が示されており、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。